



5
4504





室永六年



生種

今

己丑十一月十五日

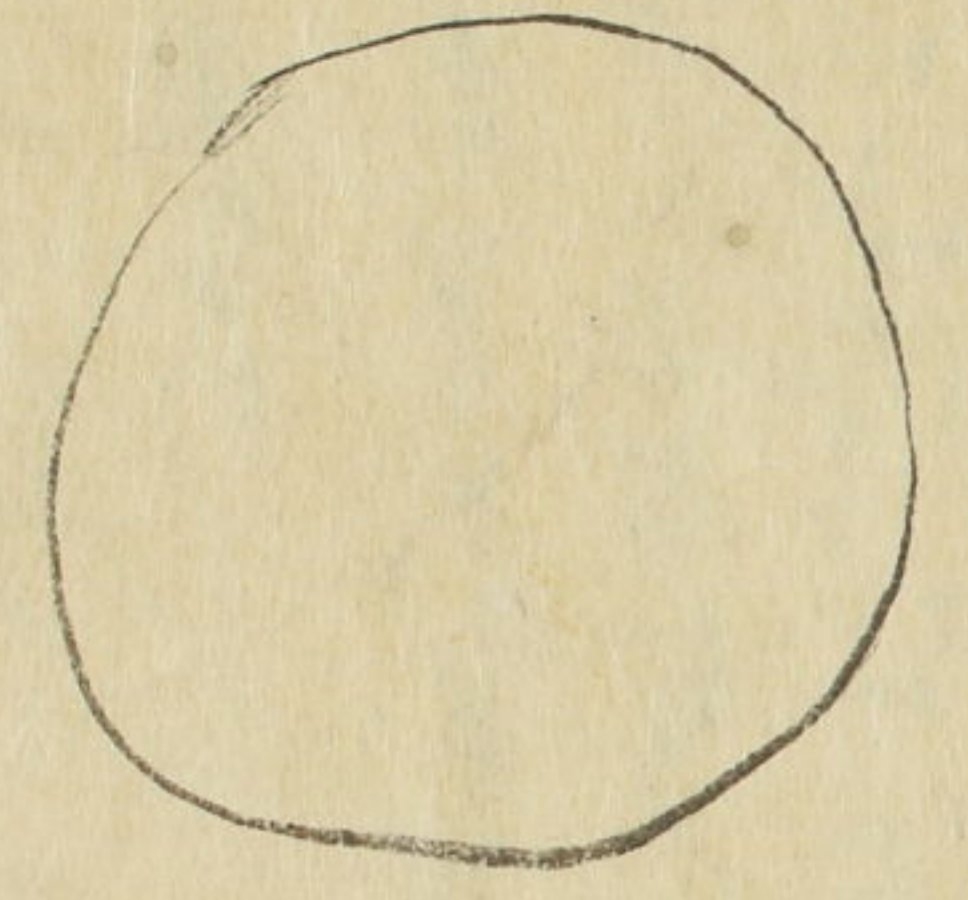
門 5
號 4504
卷

と古くお人定あつてしるるをけしめ
身く成て一うく入所合なりしをい
世もてほひゆるけりしに魂魂建以の神
るるにたれく入所合なりしをい
とらひのこいし入しるるをけしめ
とらひのこいし入しるるをけしめ
御りつるをけしめ
新しき時貞享二年申野坡
とらひのこいし入しるるをけしめ

昭和十年
七月九日
購求

其真の心は所應十高神也来し
一心を真の心と爲し氣を人の形とする
心と人
一 誠と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る

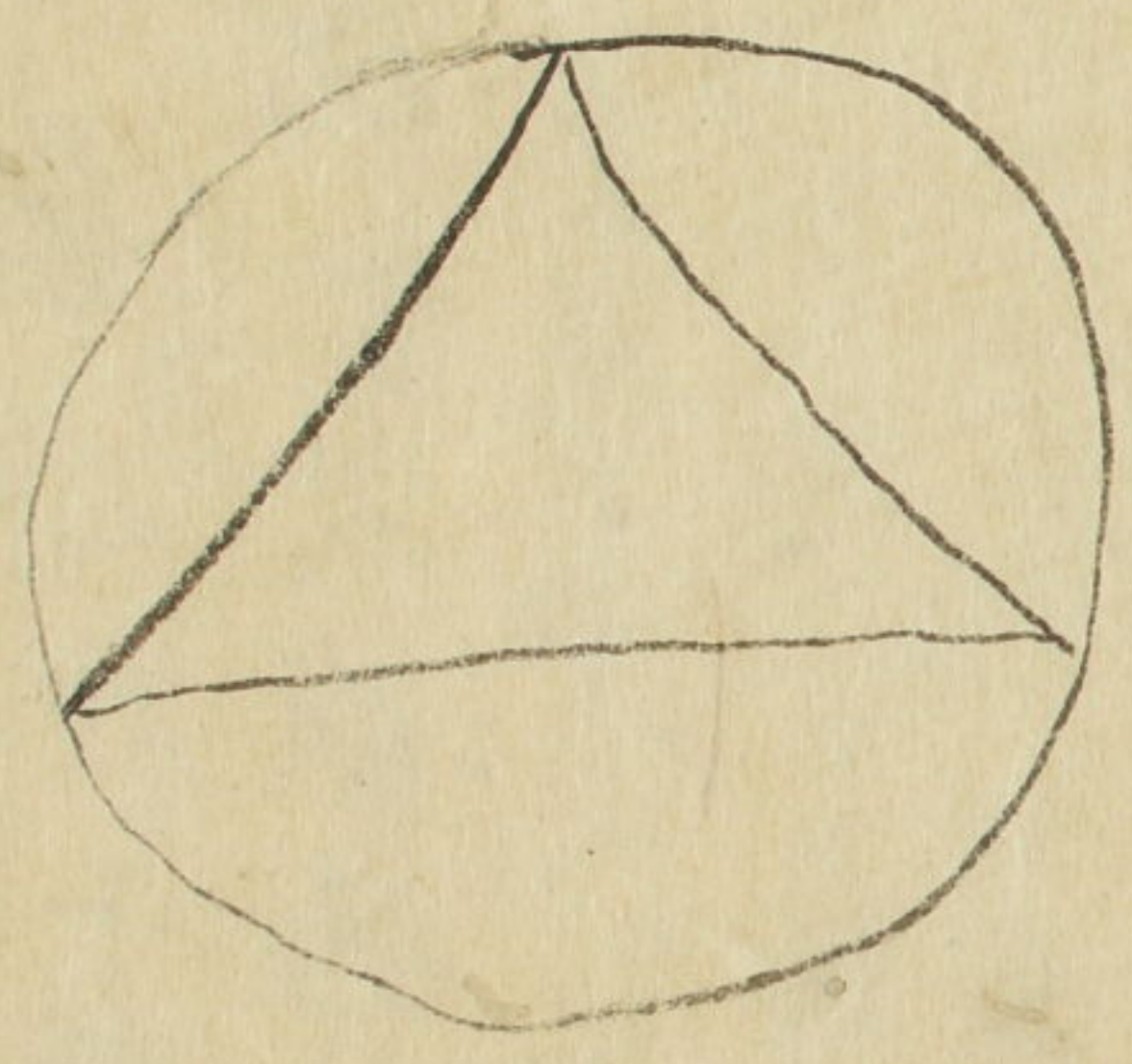
一 衆相心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
情也 情の心也 是は先天の方位に



乾を天と爲し坤を地と爲し
互に逆して心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る
心と事の中へ心と真と行を分る

一挫之圖 円を挫て直と人先は好天の
 子位を讓て事物の直を以て乾の
 候きに過坤を以て未甲に右震地に接
 一陽を生じて兌に向ふ象とて其理の
 未て直ありと云々と云々一陽生ず
 一陽生ずと云々此の直を以て陰生ずと
 平に方と云々直人仰て日月星辰雲
 俯て四方に江河禽獸草木の文を
 理を觀る事物の象とて人の文を
 人の情を以て心と故に天人比此と云々
 一と云々此の感は直を見入寄運移者

音の拾神の円挫を以て心と象を以て所と
 應てて事物の直を以て乾の
 怒を以て情と起てて其理の
 一と云々此の感は直を見入寄運移者



属遇十二昧

一 心大円鏡智式明德一身人の主也

一 景氣 事物をのぼに皆時人象情なり

一 感 其物くに入て信を起し秋の夕に

露深野ふり色につけし色相と観し言

秋の音刑 花の輝き事 ありつゝ人の意

灌人の背感し

一 位 物に應し心に属し一は如に

一 付 形色に海をぬきとけしきと人

一 並 其物に對し事と云ふなる意はと

氣氣に属し

一 見入 並に体て玄刹にさひ寄也

一 寄 前人の心と合是れ

一 運 吹波しや前人の極品なり

一 移 二つ物とて坪に能居る

一 馨 玄刹り及ぶなりを刹

一 卿寄 山居りしに物に寄と我に合

續 附應辨序内章白

字眼 眩：書換者也

一 此中 逆ると云ふ事 前の細に与作るに
逆ると云ふ事 名別り物と取交して又
前より理れしこと 此のまゝいかにと云ふ事 前
より心する時と云ふ事 此のまゝいかにと云ふ事

一 変化 芭蕉の唯守未和からと針心はゆる
こゝろに對しての教也

一 正邪一毫 前にも云へば 輪とに
ゆゑ逆るといふに ともいふ 福と云ふ 後人

一 一に一句附ありと云ふ事 此のまゝいかに
しと云ふ事 のまゝいかに しと云ふ事 此のまゝいかに
此のまゝいかに 此のまゝいかに 此のまゝいかに

石の字の教は 変了名の 輪と云ふ 拈持して 此の
傳へ

一 昨日の我に飽し 一昨日の我に飽し 一昨日の我に飽し
此のまゝいかに 此のまゝいかに 此のまゝいかに

十定解の證

一 付添に 位と云ふ事 此のまゝいかに 此のまゝいかに

舟のわたりはるるのさか
うらたに碎てわられば

馬とに碎て是れゆり作く舟のわたり
らや杯前より位と探そ前より一神と
多と碎て具より碎に怪く神と

一 靉想 一字のまづまふこころあり情を

感

「鴨のわたりはるる舟に流るも舟を
成るるにさるる身のとりの秋

「鴨の舟に流るも変るる舟のわたりはるる

舟のわたりはるる舟に流るも舟を
成るるにさるる身のとりの秋

一 舟のわたりはるる舟に流るも舟を

舟のわたりはるる舟に流るも舟を

舟のわたりはるる舟に流るも舟を

一人舟人をぬて舟を流るる

物倉の底に其日とゆい
大仰の程の穴に念入て

其人の増しぬてまゝに海に力を入れて
云其日約の雇成に使わぬに計て
よく居れいましゝわりの用と云けしこと
初て用もなぬ程に穴を詰り敷き
海にぬて居る心とけし

一見入 形の内へまゝに入て物を定む

猫のいゝも守にわかれ
といか下といふもこそ物をい

其らり怪しくいふを定てけりけり
にわかれいふ事いかにわかれと知事い
取を茶の物とさといふいかに一筆も
いふいかにいふとさといふいかに

一場 時下事とあつらん

さういふと大具の茶研坂

女々の依りはまゝ一年分

南にいふとさいふものもいふこと茶研坂
にて大八車押すこといふ男も守をい
るいふこといふこといふ事い供に老人の

竹丸を神妙の事甚陽うと遊さる竹丸
丸

一 口を収 其口を収て此に心を収て

川海に二舟勝つて此を揚て

いよく見のゆく心

のいさすしよかりを是とて此に収て

口を入けるをせしめ人運をさるに

味り女子心に人目とて此に収て

遊をさるる心とて此の心時を

一 お世の場

二人のつするかりきり

その心ゆれ人前さ

其らりの心とて此に収て

大の心を此に収て此に収て

にも解て川縁の心

一意氣 前脈の心

此縁に目をみる手なり物也

味香の黄かこ大の心

其心又も愛にして取替て虚にか

道白の不便より此書入る

と家出代り時を逃がし居るも
目付力致暇をさかれども是より電の
休りさうととされて味香と煮る所
葵の玉とこにしりてさうらうんと
うつくしく

一飽場 まるくゆきまの心

うらまの思ひさけく
返針かみずりさけさ

かくと却て不為人事之相成實の飽

そくく目には徳石什物好む
初言の比も行事はくも
返ららるるもあつても
とわくもく

一情を押 其情の流るる

何事も心にも
ふいふはくも

前に情をそくく
力あそびに
またかりぬする人

一 千変万化に理人合一と云ふ
はたかた

行儀と云ふおほいなる事

凡そ乃村子二條川切

前にかつて人別て物と有教て打
行にもお神ておまこと教して何も
貯てお世と怪くして有はる用
うらまにがいさぐらにうらま神人う
をいさぐら

付凡入系観想

是情と押句く

かけ カと取句く

意氣 おとん場

是く虚り老く

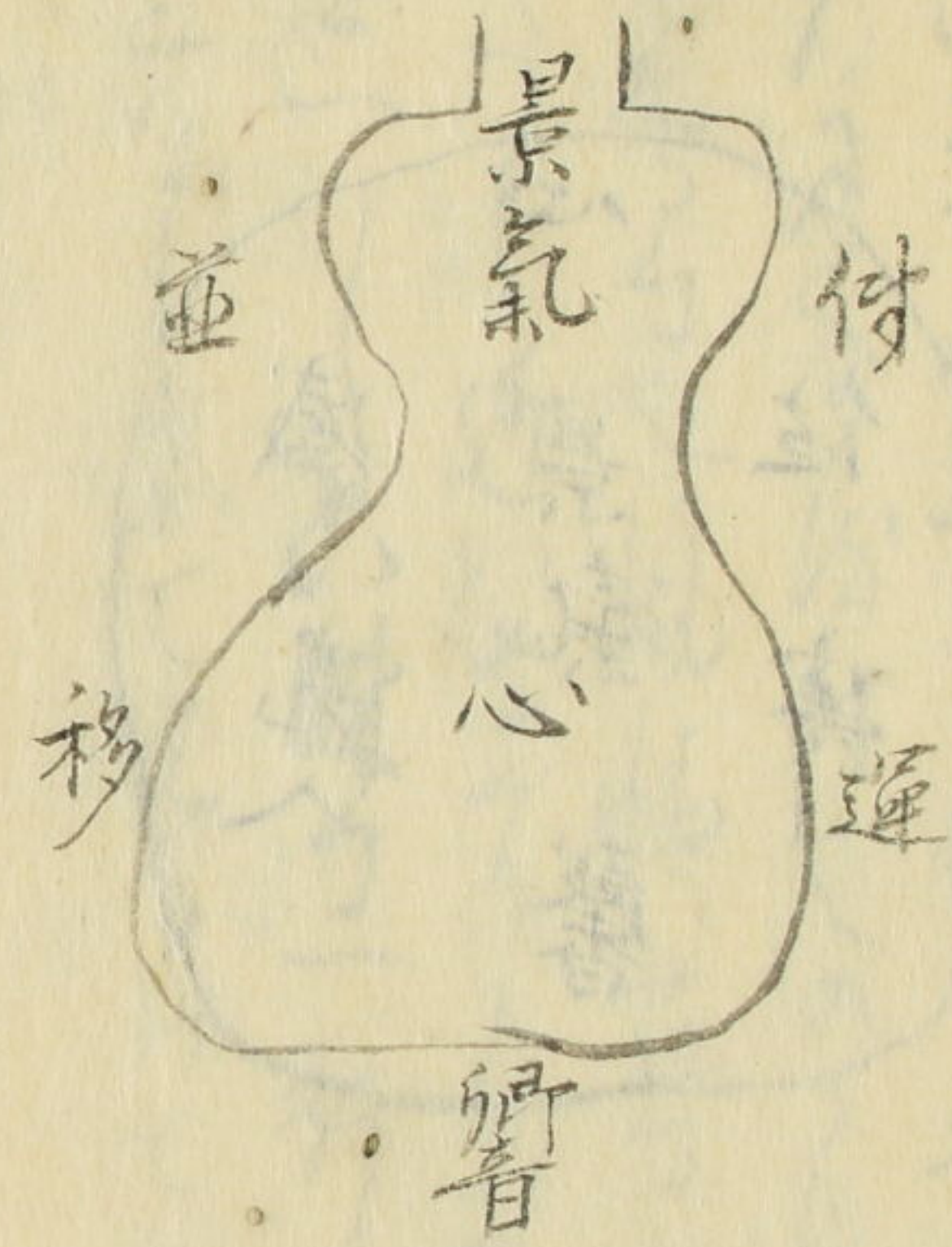
凡十四神蕉門の教とする久くは時人
作者理人をも思ひて相を不奪りらに
祇と分を唯述するのまぬし又いかに
是くはくこふ下を蕉門の教月也を
もたす唯虚字と云ふがうらまをいかに

我もまた此の者さふらむとて
 情もよめぬとて杯をひきつる
 みるに大方位品より記す
 利のなきふれはくしのれと
 ありをらふとて曲情の百
 けりてつゝとてつゝとて
 退きつゝとてつゝとて
 事二つも集てそらとて
 知久

俳諧連歌附應之圖



心者真情也。景氣者假接也。感
 者寄事感也。位者應物現也。故
 屬心。何者形辭品也。並者連續
 之言也。故景氣見入者。挫前句
 也。寄者相交之志也。運者續前
 也。點也。移者兩句不相替也。馨
 者不顯言而其馨分明也。響者
 如應聲不留意也。跡氣機合。是
 離錯之大意也。



心見入 挫るる馨也

西まゝも音前も月よみえん

「や鶴鶴の古りみわらひ」

景氣運

極く下し心えたるがゆ

枯く時を新く作る後

景氣見合

眼にもよむのほろりたるあ

二のこの若く何れも死の境にき

公・女真の... 景氣見合

心付

うつろひたるあはれのみりんが

舞つる影の化粧のりや

心感

挫るる馨

秋のりりしと人留るるあ

我れにけり母をけりし

景氣見入 挫る付

となくと所をり候のいよに

誰やと声ひんあはれ

字也級

心に出る聲は林の鳥の如し

陸奥の山人も鳥の如し

氣又見入 挫る聲

半の葉にふる風を人の法

ひきつらむとにほつるを人の法

心見入 挫る聲

心に物より心を忘る

世のくさ都に心は流るる

景字

今もや心は流るる言ふに

竹の連子と竹のかげに

心

物をよむに如く

新長をよむに橋大工

心感

かりり痛くも懐かしくも
又いりぬる者にならば

心付

挫くる聲

やに離る字のりらり
酌しと歌を抄身は鏡山

心付 ころり時分

素陽うつろふにぬる
病りや女より森にゆる舟

紫氣袖

萩に薄に二の葉神

初く入る一七節子より取て

紫氣寄

挫くる付

おしと年ふりも清く
紫氣入る庭に雪をうらむ

心感

挫くる響

行ぬる目もさへき
響もと別れぬ世にゆ

紫氣付

今日とまじく武に趣く其に
秘ぶる事なき人其の心

業と氣

白川や月もささげを
秘見さほふ村人の心

業と氣寄

如風長柳の如きのけり
かきくしてけりけり

業氣見入 控ふる秘世に背く

湯飯を露にいそむ
控ふる秘世に背く

心見入 控ふる秘世に背く

如風長柳の如きのけり
かきくしてけり

心寄

公別りかに世居る所
竹の便に傾けり

所合不覺の糸

日色くとも人合

髪も毛も寝相も寝とくまき
凡そさきかゆ油も汗
死に以て貝もさきを好む人
蝶もさきを好むにさき
舟も海にさきもあつ橋

石谷附心口傳

五品八口決

之業と反り

いさむるにまもり
娘ににち日見娘もさき

歌句



大小きく杖裏てまか
女房人離別して退夜女の中に

控句

明地塔りて夜合な
いさむるにまもり
いさむるにまもり
高きまの店賃り事

昔

志句

庭にさきちちのり
細きまの店賃り事

凡五言の漢文は是後風力終の起りて未
練の作者のつれを述にのりて一系は
まは心の起りの起れはまるとるか時の乾坤の
ほかにまるとりて日月と星とつれを尖れる時
死身人情にて虚無の中つれを起つ時
唯前つれを消えたりとてつれを起つる者に好
つれを起つる人

續附應りの辨

附るこゝに起つるに一は述場を起るの場を

世より起るを起るの濃薄の起りて起りて自由
の物に起るの起りて起るの起りに起る
二つに起るに起るの起りて起るの起りに起る
起るを起るの起りて起るの起りに起る
世場と起るの起りて起るの起りに起る
か又一又世を起りて起るの起りに起る
起りて起るの起りて起るの起りに起る
有是の起りに起るの起りて起るの起りに起る
作者の起るの起りて起るの起りに起る
又起るに起るの起りて起るの起りに起る

前らに美刺なく俗漢平直の下の
てうに風雅の二をりく、之禁がしらよ
の、何れは野路施の、作者とすし、先
世らの物、皆其意を調り、
以ともつる、つらに、
場を、つらに、
一し、
云らる、
自心、

心、
ら、

松古條

河、
出、
患、
天、
會、
所、
可、

一 所方の前の動と動とふと定て物好い海
 ありて
 一 今に天候のふと水着のふと力を入
 一 前より水着の動と水着の先達に海へ
 一 知るは
 一 所方に二方よりたふて一定とる
 一 白り事

一 一割のふと世を供えて、
 一 一割のふと野を東鷄飲

千眼一割

二海へ夏てかふと海へ
 一 一割のふと海へ

理

一 昨日のふと海へ
 一 下船のふと海へ
 一 前へ海へ

一 海へ海へ
 一 海へ海へ

能場

一 海へ海へ
 一 海へ海へ

中下河場

カキ... 行徳寺入ノ中ニ川口ナク

ふと... せうり... せうり...

一ノノ河場

か... 舟ノ... 舟ノ...

一ノノ河

橋ノ... 河行... 橋ノ...

身下服一到... 河場... 舟ノ...

ら... 舟ノ...

河場中... 舟ノ... 舟ノ... 舟ノ...

舟作

後橋... 舟ノ... 舟ノ...

舟中... 舟ノ... 舟ノ...

舟ノ... 舟ノ... 舟ノ... 舟ノ...

舟ノ... 舟ノ... 舟ノ... 舟ノ...

美と入るまう一宵控ふ夢の頃とてさるる
いんまゝいづれかきまゝ世にわづらひて
まゝのまゝいづれか

物投寄

そがし紙のまゝのまゝ

くさ紙のまゝのまゝのまゝ

まゝ物投寄のまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

八卦附方

福のまゝのまゝのまゝ

後心のまゝのまゝのまゝ

清のまゝのまゝのまゝ

片見のまゝのまゝのまゝ

初の内舞のまゝのまゝ

極まのまゝのまゝのまゝ

何のまゝのまゝのまゝ

花を散るのまゝのまゝ

白

響

志

移

堤より向ふ方へ... 山より社へ...

見入

如新乃所... 可始...

老

細風に向ふ... 大より...

八昧

句

外... 新の...

付

蝸牛の自由...

郷音

遠く... 舟...

寄

塩瓶の蓋...

移

木乃陰...

忘

稲妻...

見入

相見の言は流おろし川に垣

見立

おろし火とともしる重なるる者

二箇古附並列

格

廣敷に海九州のまな

そぬり心とちりあはれ

長橋をか迎て入る

おぬに早いころもあつた

流

廣敷に海九州のまな

そぬり心とちりあはれ

長橋をか迎て入る

おぬに早いころもあつた

味に云、そり場に居る人

五箇古附並列

廣敷に海九州のまな

そぬり心とちりあはれ

格

長橋をか迎て入る

公の下り風にあたる者あり思ふ

所

廣文に於て何れも生れ難

絶無切り起り音

定念未だに成るる思ふ

いづれ白き一り松林に集る

長橋より近て入る月

鳥宿子も天の影に映りて

廣文に於て何れも生れ難

いづれ白き一り松林に集る

長橋より近て入る月

情 此

走

弟のいふ動ぬかくに思ふ

廣文に於て何れも生れ難

昨日の夜の暗く入りし

長橋より近て入る月

いづれ白き一り松林に集る

口訣に云変化し生の境に不可羨

七竹岡より觀ふ

格

故衣の意も河原の細き針

法

初冬に繪に盛るる

糖 名前の書一通の油箱

所 丁酉の書一通の油箱

花 花の香の節にさかぬ花の光

比 比の香の節にさかぬ花の光

情 木花の比今をさかぬ花の光

三反切 今をさかぬ花の光

今をさかぬ花の光

一 今をさかぬ花の光

一 今をさかぬ花の光

今を

今をさかぬ花の光

今をさかぬ花の光

今を

今をさかぬ花の光

今をさかぬ花の光

風

今をさかぬ花の光

ふくま出さる事一は物心にしるが故
其故いふにても此は年引く供一長
傷みさる目換さる一

心くしけく小田には物心は
遊子版死し紅もさる事
死にさる事一は年引く留に一

一死し字さく一は正花

毛纏入る事一は物心
皮肉骨の事一は
のしる事一は物心

皮 鳥金さる楊肉の骨に冬り来て

肉 ちまき入る事一は物心
心はさる事一は物心

骨 秋に脈と大事の事一は物心
二皮肉の事一は物心

一 髪向て留に中に入り字入
知字力の事

嵐雪問
野坡問

春初、書く
春初、書く

支考問

唯然問

去來問

卷一の所成

卷四十八字

卷四の寄

ふら問答のくつと問答にも年一歳

死活の論

州の案に世師のさり

りく子れ死をなすこと

活

かきもまふ秋の一

毎しらして死をい

高れに修身する

是具自向の意の

又りし下と問

法にさりて

まじりて

問に類よ

死活の事

の秘に

奉納神法樂

初稿夢想

元服被徒

右ふも流儀なる事世格の目録

音通連聲妙事

ア イ ウ エ オ

カ キ ク ケ コ

チ シ ス セ ソ

タ チ ツ テ ト

ナ ニ ヌ ネ ノ

ハ ヒ フ ヘ ホ

フ ミ ム メ モ

ヤ 井 エ オ

ウ リ ル レ ロ

ワ イ ウ エ オ

堅と音通ふと云

横と連聲と云

頼朝の兵は軍の長官

伊勢奉納神法集

何れ木の死と知れぬ白の法

満松聖廟法集

ヤ音通

松風乃白入廟の演り意

名わさるいにし頃の蓮

あつたは歌いあ光にゆて

一 夢想の事いふは、愛人字をいふは、夢想
力致すなり、解い筆の書、白くは、終り
百二に成る、夢想短くあり、短くにて
留一、一、与、板石、目、以、

二 新定、秘、徒、力、事、に、い、火、力、字、又、可、く、は、
も、中、に、は、ゆ、く、し、た、く、を、い、ふ、事、は、
衣、力、也、に、水、色、一、二、与、是、一、一、

一 婚姻、力、事、に、別、離、力、事、を、い、ふ、事、は、
其、不、志、を、い、ふ、事、一、執、業、の、事、を、い、ふ、事、は、

右、力、不、口、傳、由、一、事、之、事、業、に、及、び、
し、り、の、事、中、に、其、門、乃、統、の、一、事、
他、見、他、云、可、く、一、事、其、知、り、た、り、と、
他、と、其、事、の、事、は、

道統之傳是也

于時室永六己丑年

十一月十五日

芭蕉 去来 秋夕 安藤千藏 俳名
秋賀 音角

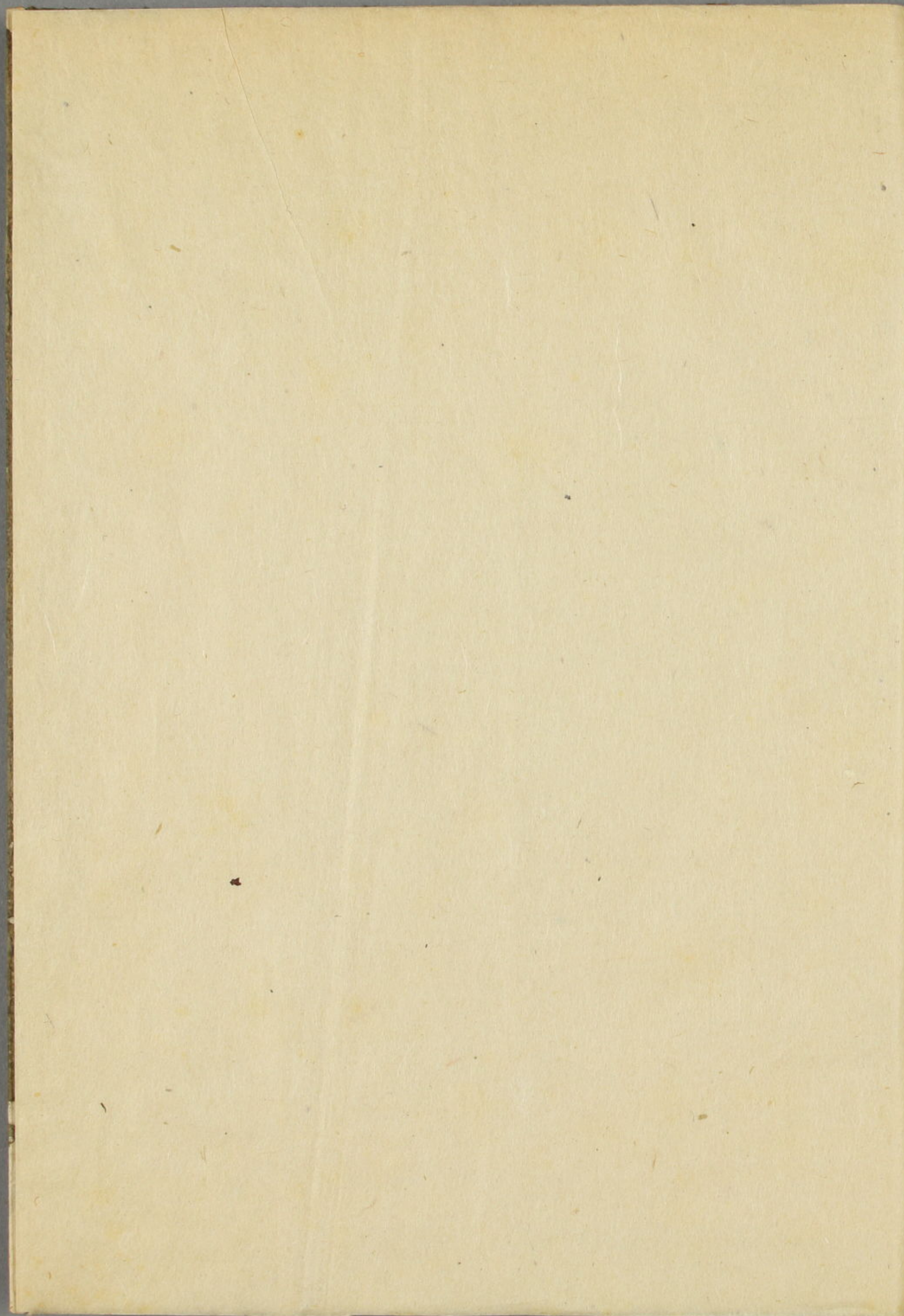
石之傳之後素堂其水傳之其後又其
苗入門其水具永之具角物語其水
音角傳之加嘉之 其水音角源也
三傳都合 相生種 其水号之者也

山口音角

久智

及





Handwritten text in Chinese characters, written in a cursive style. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are faint and difficult to decipher, but some legible characters include "秋" (Autumn) and "子" (Child/Seed). There are also some larger, more prominent characters, possibly "子" and "子".

秋
子
子



